

インドネシアと日本の子どもにおける遊びと仕事 (基礎調査報告)¹⁾

矢野 喜夫, マスルン, ビモ・ワルギト,
ヤプシル・ガンディー・ウィラワン

Play and Work in Indonesian and Japanese Children: A Report of Basic Survey

Yoshio YANO, Masrun²⁾, Bimo Walgito²⁾
and Yapsir Gandhi Wirawan²⁾

Received September 29, 1979

I は じ め に

戦時中インドネシアに滞在した心理学者品川不二郎氏は、戦後まもなく「ジャワの子ども」という小文を児童心理雑誌に寄せて、インドネシア・ジャワの子どもの生活の姿を簡潔・的確に描いている(品川, 1947)。それによると、ジャワの子どもは手伝いをよくし、物売りなどで家計を助けることもよくするという。「一般にジャワの子供の生活は、深く大人の生活に食い込んでいる。親の手伝と共に子供の生活圏が確立している。」また「ジャワの子供は実におとなしくして、お互いに仲良しである。ジャワの子供は喧嘩をしないので有名である」ともいっている。これらの点は最近でも、文化人類学者原ひろ子氏によっても指摘されていて(原, 1979)、古くからのジャカルタの住民であるジャカルタ・アスリの子どもたちは、「学齢期になる前から、よその家の簡単なおつかいをしたり、ちょっとした手伝いをして“かせぐ”ということをする」覚える。ただしこの場合は必ずしも子どもは家計を助けるのではなく、自分のこづかいにしているらしい。また、同じジャカルタに住んでいるジャワ人では、「子どもがけんかを始めるとただちに子どもたちを引き離して、一人ひとりを別の部屋にとじこめたり、遠くへ連れて行ったり」して、理由を問わないという。それは、ジャワ人は「理由はともかく、人と荒々しくあらそうことは悪であるという考え」によるらしい。この点では、ジャワ人は同じジャワに住む先のジャカルタ・アスリやスダ人とう違うようである。われわれもたった1カ月のインドネシア滞在であったが、子どもがけんかをしたり、いじめられていたりするのは一度も見なかった。

1) 本研究は昭和53年度文部省科学研究費補助金(海外調査)「認知発達に関する比較文化的研究」(課題番号304126, 代表者: 岡本夏木)によるものである。

2) Gadjah Mada University (Indonesia)

先の品川氏はさらに、「ジャワの子供達は早くより大人の世界に関連をもつために、子供本来の世界たる遊戯の世界は日本に比べると貧弱である。その代わり、遊戯が同時に生産的であるという特徴がある」といっている。ジャワの子どもの遊びの世界が貧弱であるというのは、当時はともかく現代の日本の子どもの遊びの状況と比べれば、われわれの得た印象からは当たらないように思える。品川氏自身も、貧弱とはいいながらジャワの子どもの多様な遊びを紹介している。遊びが生産的、つまり実失活に密着していて実益を兼ねるものが多いということは、子どもの社会化という点からみて重要と思われる。このことは、かつて文化人類学者M・ミード(1928, 邦訳1976)がサモアの年長の子どもによる魚とりなどの遊びを、遊びであると同時に仕事でもあるといっていることと一致する。現代の日本の子どもに失なわれつつあるのは、こういった生産的遊びや子どもの仕事ではないだろうか。

われわれはインドネシアの子どもの認知発達を日本の子どものそれと比較して明らかにしたいと考え、両国の心理学者の協力の下に、比較文化的な発達研究を行ってきた。その一環として、たんなる実験や検査にあらわれた認知機能の側面だけを問題にするのではなく、それを取り巻く子どもの遊びや仕事などの生活の全体像と把握することが、認知機能を理解するためにも必要だと考えた。そこでわれわれはこのたび、インドネシアの子どもが日常どのような遊びをし、手伝いや仕事をし、家での勉強をしているのかを知るために、質問紙による小中学生の調査と、われわれ自身による遊びを中心とする子どもの生活の観察調査を行なった。後者の調査については別稿で扱うことにして、ここでは質問紙による調査の結果を分析することにする。

遊びの定義は古今いろいろな領域の学者によってなされているのが、それらの定義の検討はひとまずおいて、ここでは「いわゆる内発的動機づけによって、それ自体の楽しみのために行なわれる多少とも現実の適応的活動とは独立した自発的活動」と定義しておく。それに対して、いわゆる仕事は「他者あるいは自分自身によって強制されたり統制される多少とも義務的な活動で、その活動以外の目的のためのもの」と定義しておく。ここでいわゆる学業とか勉強といわれる活動がどちらに属するかということが問題になるが、英語で“work”というと「仕事」という意味と「勉強」という意味の両方があるように、どちらかといえば仕事に属すと考えられる。ただし、学業も本来は遊びのように内発的に動機づけられた自発的活動であるべきかもしれないし、現在の学校教育がそれを実現していないとすれば、取り組むべき問題として取りあげられなければならないだろう。しかし、学業がそれ自体の目的で行なわれるかそれ以外の目的や動機づけで行なわれるのかという問題はさておいても、それが他者や自分自身による何らかの統制や規則にもとづく自制心や努力感を必要とする活動であるという点では、仕事であるといえる。この点に勉強のような広い意味での仕事、就学以後の子どもの活動において遊びから分化していく契機がある。子どもは遊びと仕事の未分化な幼児期を終えて、この両者が分化した児童期以後の生活に入るのである。

現代の子どもの遊びと仕事の世界はどのような状態にあるのだろうか。われわれはインドネシアと日本という文化的にある程度の共通基盤をもちながら多くの点で異なった文化的・歴史的状況にあるアジアの2カ国で、子どもの遊びと仕事の実態をとらえることによって子どもの生活のあるべき姿をさぐろうとした。この調査研究は、結果的にはいくつかの手違いや不備を生じ、必ずしも成功したとはいえないが、上記のような問いにいくらかの示唆を与えることはできた。

II 方 法

質問紙 上記のような問題設定から、われわれは学校外の子どもの日常の生活活動として、1日の活動の時間表を作成してもらい、遊びと仕事や手伝い、さらに勉強について、どんなことをいつどれくらいの時間、どこでだれといっしょにしたかを問う質問紙を作成した。質問形式はすべて「きのうどうしたか」という形式をとった。これは、とくに子どもにおいては一般的にたずねるよりも、昨日という特定の日についてたずねるほうがより正確で具体的な信頼しうるデータが得られると考えたためである。したがってこのように質問を「きのう」に特定したことから、ウィークデーの活動を知るために、実施曜日は月曜日を避けるよう配慮された。

質問紙の原版は英文で作成され、インドネシア用にはインドネシア側共同研究者によってインドネシアの質問紙が作成された。日本用についても同様に、日本語版が作成された（付録参照）。

質問内容は、まず昨日1日の朝起きてから夜寝るまでの活動を、1時間刻みの時間軸の印刷された表に自由に記入してもらい、そのあとで、遊び、仕事や手伝い、宿題や勉強の3点について、「どんな」「いつどれくらいの時間」「どこで」「だれと」をそれぞれ最大5項目ずつ記入してもらった。

被験者 被験者は、インドネシア側と日本側での当初の打ち合わせと実際の実施とのくい違いから、インドネシアでは小学校2，4，6年生，日本では小学校3，6年生と中学校2年生とになってしまった。そのため直接の比較は小学6年生以外にはできないが、最初の計画原案では小学生を対象に予定していたので、小学生を中心に結果を見ていくことにする。

インドネシアでの被験者は、中部ジャワの中心都市ジョクジャカルタ市の師範大学（IKIP）附属小学校2，4，6年生各1クラスずつ合計108名である。日本での被験者は京都市の公立小学校2校F小学校，U小学校の3，6年生で1校につき1クラスずつ，両校で各学年2クラスずつと，京都市の公立S中学校2年生2クラス合計230名である。両国の学年別・判別の被験者数は

表1 a. インドネシアの被験者数 （単位：人）

性 別 \ 学 年	小学 2年	小学 4年	小学 6年	合 計
男	16	20	13	49
女	21	20	18	59
合 計	37	40	31	108

表1 b. 日 本 の 被 験 者 数

性 別 \ 学 年	小学 3年	小学 6年	中学 2年	合 計
男	38	37	35	110
女	37	41	42	120
合 計	75	78	77	230

表 1 a, 1 b のとおりである。

調査年月日 インドネシアでの調査は、インドネシア側共同研究者によって、1978年12月21日（木）に行なわれた。日本での調査は F 小学校1979年 5 月 8 日（火）、U 小学校 5 月12日（土）に各学校各クラスの担任教師に依頼して実施された。S 中学校については、1979年 5 月に実施された。

III 結 果 と 考 察

調査データはすべて日本側に送られて集められ、日本側の手で整理・分析された。インドネシア側のデータについては、子どもの記入したインドネシア語の読み取り等で困難な点があり、読み取り・解釈不明な記入事項もいくらかあったし、期待したような回答のしかたをしていない箇所も両国にあったが、ここでは読み取り・解釈・数量化できた部分について、両国のデータを比較しながら検討する。

1 日の生活時間 前日朝起きてから夜寝るまでの生活時間の配分は、われわれの質問紙の時間表への記入によって知ることができる。

インドネシアと日本のデータによる起床、登校・始業、帰宅、夕食、就寝といった基本的日課の時刻の最頻値は表 2 のとおりである。

表 2. 基本的日課の時刻の最頻値（カッコ内の数字はその時刻を答えた人数）

国	学年	性別 (被験者数)	起 床	登校・始業*	終業・帰宅*	夕 食	就 寝
インドネシア	小学2年	男 (16)	5:00 (15)	7:00 (15)	10:00 (15)	7:00 (9)	10:00 (5)
		女 (21)	5:00 (20)	7:00 (19)	10:00 (19)	6:00 (4) 7:00 (4)	8:00 (7)
	小学4年	男 (20)	5:00 (17)	7:00 (16)	12:00 (13)	6:00 (6)	10:00 (10)
		女 (20)	5:00 (16)	7:00 (20)	12:00 (14)	7:00 (8)	9:00 (7)
	小学6年	男 (13)	5:00 (9)	6:30 (5) 7:00 (5)	11:00 (6)	7:00 (5)	10:00 (6)
		女 (18)	5:00 (12)	6:30 (15)	11:00 (10)	7:00 (5)	10:00 (7)
日本	小学3年	男 (38)	7:00 (19)	8:00 (24)	F 校2:00 (7) U 校4:30 (7)	6:30 (8)	9:00 (12)
		女 (37)	7:00 (21)	8:00 (22)	F 校2:00 (9) U 校4:00 (8)	6:00 (11)	9:00 (12)
	小学6年	男 (37)	7:00 (13) 7:30 (13)	8:00 (23)	F 校4:00 (10) U 校2:30 (7)	6:00 (8)	11:00 (8)
		女 (41)	7:00 (17)	8:00 (26)	F 校4:00 (8) U 校2:30 (8)	7:00 (10)	9:00 (10) 10:00 (10)
	中学2年	男 (35)	7:00 (12)	8:00 (18)	4:00 (13)	7:00 (9)	11:00 (10)
		女 (42)	7:00 (15)	8:00 (27)	5:30 (12)	6:00 (8)	11:00 (14)

* 一般にインドネシアでは始業・終業時間

これによると、インドネシアと日本とでは生活時間に大きな違いがあることがわかる。まず起床時間はインドネシアでは5時がもっとも多いのに対して、日本では7時がもっとも多い。5時というのは、調査用紙の時間表が5時から始まっていたことに影響された可能性もあるが、そうだとすると遅くとも6時までには起床しているといえる。それに対して日本では7時が一般的であり、インドネシアとはほぼ2時間の差がある。まだ登校時間がインドネシアでは7時、日本では8時と、インドネシアでは1時間早い。なおインドネシアの7時というのは学校の始業時間であり、日本の8時というのは家を出る時間であると考えられるので実質的には1時間半くらい違うことになる。一般的にインドネシアでは、比較的過ごし良い午前中に社会生活全体が集中して行なわれるため、朝の始まりが早いのである。したがって小学生の終業・帰宅時間も午前中までである。これに対して日本の小学生では学校によって異なっているが、2時から4時半までにわたっている。ところが夕食時間は両国でほぼ同じ6時か7時までであり、就寝時間も、これはかなり個人差が大きいがほぼ9時から10時までに集中している。インドネシアの子どもも夜はかなり遅くまで起きていることがわかる。それでも朝早く起きられるのは午後昼寝をする慣習があるためである。

この時間表にもとづく遊び、勉強、手伝い等の時間表は、インドネシアのデータについては事項の記入がほとんど1時間刻みであるため算出する意味がないが、日本のデータについてはかなり詳細な時間幅で記入されているため、表3のように平均時間を算出することができた。当然予想できたことではあるが、学年の上になるにつれて遊び時間が減り、勉強時間が増えていることがわかる。ところがテレビ視聴時間は学年によってあまり変わらず、手伝い時間は少ないことが注目される。

遊びの種類 きうのどんな遊びをしたかという質問に対する回答で、両国共通に分類できる遊

学年	性別	遊 び 時 間	勉 強 時 間	テレビ視聴時間	手 伝 い 時 間
小学 3 年	男	2.98(1.70) N=22	1.03(0.42) N=27	2.40(1.33) N=33	0 N=0
	女	2.16(1.18) N=24	1.33(0.60) N=28	1.84(1.15) N=27	0.44(0.11) N=4
小学 6 年	男	1.75(1.00) N=25	1.85(1.32) N=34	1.68(1.10) N=35	0.96(0.51) N=6
	女	1.45(0.91) N=22	1.34(0.85) N=41	1.73(1.14) N=39	0.68(0.35) N=19
中学 2 年	男	1.66(0.74) N=8	3.11(1.60) N=24	1.71(0.88) N=17	0.67(0.24) N=3
	女	0.69(0.32) N=4	2.19(1.21) N=37	1.73(0.90) N=36	0.92(0.53) N=6

（カッコ内は標準偏差。Nは記入者数）

表4. 両国共通の遊びのカテゴリー別の該当者数（カッコ内は被験者数に対する比率）

国	学年	性別(被験者数)	ボール遊び・球技	おにごっこ・かくれんぼ等	ビー玉	ゴムとび	自転車	ままごと・もの売りごっこ	トランプ・ゲーム・将棋・チェス	本マンガ	音楽	人形遊び
インドネシア	小2学年	男(16)	11(.69)	8(.50)	4(.25)	0	1(0.6)	1(.06)	4(.25)	0	1(.06)	0
		女(21)	8(.38)	5(.24)	0	17(.81)	2(.10)	5(.24)	1(.05)	0	1(.05)	6(.29)
	小4学年	男(20)	18(.90)	2(.10)	14(.70)	2(.10)	3(.15)	1(.05)	5(.25)	0	1(.05)	0
		女(20)	15(.75)	1(.05)	1(.05)	14(.70)	0	3(.15)	1(.05)	0	0	3(.15)
	小6学年	男(13)	3(.23)	2(.15)	5(.38)	0	3(.23)	1(.08)	2(.15)	0	0	0
		女(18)	6(.33)	0	1(.06)	3(.17)	0	0	2(.11)	2(.11)	0	4(.22)
日本	小3学年	男(38)	13(.34)	7(.18)	0	0	2(.05)	0	3(.08)	1(.03)	0	0
		女(37)	3(.08)	10(.27)	0	1(.03)	1(.03)	6(.16)	4(.11)	1(.03)	1(.03)	1(.03)
	小6学年	男(37)	13(.35)	3(.08)	1(.03)	0	1(.03)	0	12(.32)	4(.11)	0	0
		女(41)	5(.12)	1(.02)	0	0	0	0	5(.12)	6(.15)	3(.07)	0
	中2学年	男(35)	2(.06)	0	0	0	1(.03)	0	0	1(.03)	1(.03)	0
		女(42)	1(.03)	0	0	0	0	0	2(.05)	4(.10)	4(.10)	0

びについて各カテゴリーに当たる遊びをあげた人数を示したものが表4である。これによって、かなりの種類の遊びが両国で共通していることがわかる。とくにここにあらわれた頻度からみて共通性の高いのは「ボール遊び・球技」「おにごっこ・かくれんぼ等」「トランプ・ゲーム・将棋・チェス」と低学年の「ままごと・物売りごっこ」である。また「ビー玉」や「ゴムとび」も日本のデータでは少ないが、潜在的にはポピュラーな遊びであろう。「ボール遊び・球技」は普遍的に子どもに人気のある遊びと考えられるが、その内容は両国でかなり違っている。表5は「ボー

表5. ボール遊び・球技の内容（数字は件数，カッコ内は被験者数比）

国	学年	性別(被験者数)	サッカー	カスティ	野球・キャッチボール	手打ち野球 ボーリング 野球	ボール遊び ボール投げ	バトミントン	ピンポン	その他
インドネシア	小2学年	男(16)	5(.31)	4(.25)	—	—	3(.19)	2(.13)	2(.13)	0
		女(21)	0	7(.33)	—	—	1(.05)	1(.05)	1(.05)	0
	小4学年	男(20)	4(.20)	15(.75)	—	—	0	3(.15)	4(.20)	1(.05)
		女(20)	0	14(.70)	—	—	0	3(.15)	0	0
	小6学年	男(13)	0	3(.23)	—	—	0	0	0	0
		女(18)	0	3(.17)	—	—	1(.06)	1(.06)	1(.06)	0
日本	小3学年	男(38)	—	—	8(.21)	3(.08)	1(.03)	0	—	1(.03)
		女(37)	—	—	1(.03)	0	2(.05)	1(.03)	—	0
	小6学年	男(37)	—	—	7(.19)	2(.05)	2(.05)	0	—	2(.05)
		女(41)	—	—	0	0	3(.07)	0	—	4(.10)
	中2学年	男(35)	—	—	1(.03)	0	0	1(.03)	—	0
		女(42)	—	—	0	0	0	1(.02)	—	1(.02)

ル遊び・球技」の内容別に件数をあげたものであるが、これによるとインドネシアでは、サッカー、カスティ (kasti)、バドミントン、ピンポンが多く、日本では野球、キャッチボールと野球に似たボール遊びが多いことがわかる。「カスティ」という遊びはとくにインドネシアの4年生男女にきわめて高い頻度であらわれているのが目立つ。この遊びは現在のところ日本のわれわれにははっきりわからないが、ソフトボールに似たボール遊びのようである。それはさておくとしても、両国の子どもに人気のある球技の違いはそれぞれの優勢なスポーツ文化を反映していることは容易に察しられる。「おにごっこ・かくれんぼ」のカテゴリーには、インドネシアの2年生男子に多い戦争ごっこや女子に多い追いかけっこを含めた。

おもに女子の遊びである「ままごと・物売りごっこ」は、母親やおとなの女性の家庭や外での活動を模倣した役割遊びであるが、これはわれわれのインドネシアでの観察調査でもひじょうに多く目にした遊びである。この種のごっこ遊びには、「ままごと」(masak-masakan; masak = 料理する)、それと連続した「物売りごっこ」(pasar-pasaran; pasar = 市場)、お母さんごっこに当たる「子どもごっこ」(anak-anakan; anak = 子ども)「お父さんごっこ」(ayah-ayahan; ayah = お父さん) などがある。またこの表には含めなかったインドネシア独特の遊びとして、地面に土で家の平面的な間取りを作る「家ごっこ」(rumah-rumahan; rumah = 家) が、2年生女子で6人 (29%) 6年生でも男女1人ずつあった。日本では、3年生女子で、「お母さんごっこ」「ままごと」「ごちそう食べごっこ」「お医者さんごっこ」「幼稚園ごっこ」「放送局ごっこ」があったが、日本の場合、母親や父親の家庭での役割や生産的役割を演じる遊びが減ってきている印象をうける。

日本の子どもだけに見られた遊びとしては、6年生男子のテレビゲームが5人 (19%)、中学2年生でインベーダーゲームが男子12人 (63%)、女子2人 (12%) ほどあったのが目立っている。

遊びの場所 それぞれの遊びについて、どこで遊んだかという質問についての結果は表6のと

表6. 遊ぶ場所 (数字は該当者数, カッコ内は記入者数比)

国	学年	性別 (記入者数)	家の中	家の敷地前庭	道・近所	公広 園場	ゲームセンター・その他
インドネシア	小2 学年	男 (13)	10(.77)	6(.46)	0	5(.08)	0
		女 (19)	15(.79)	4(.21)	3(.16)	8(.42)	0
	小4 学年	男 (18)	10(.56)	13(.72)	2(.11)	7(.39)	0
		女 (20)	15(.75)	16(.80)	1(.05)	3(.15)	0
	小6 学年	男 (13)	7(.53)	6(.46)	2(.15)	0	0
		女 (17)	14(.82)	2(.12)	1(.06)	1(.06)	0
日本	小3 学年	男 (25)	12(.48)	13(.52)	7(.28)	3(.12)	0
		女 (26)	16(.62)	12(.46)	2(.08)	2(.08)	0
	小6 学年	男 (27)	15(.56)	6(.22)	10(.37)	2(.07)	0
		女 (26)	19(.73)	1(.04)	2(.08)	6(.23)	0
	中2 学年	男 (19)	6(.32)	2(.11)	2(.11)	1(.05)	12(.63)
		女 (12)	9(.75)	2(.17)	0	1(.08)	2(.17)

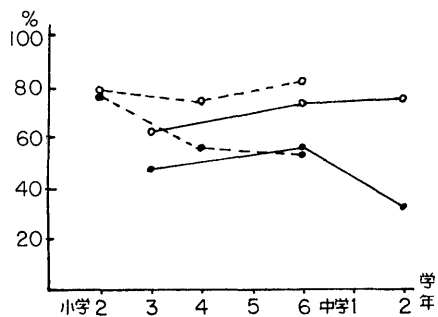


図1. 家の中で遊ぶ割合

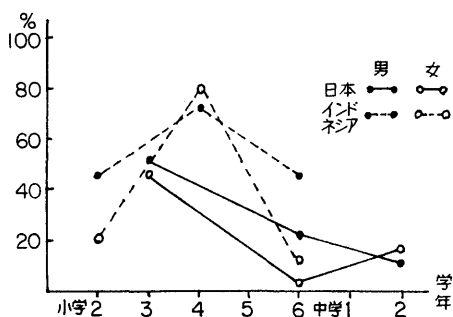


図2. 家の敷地・前庭で遊ぶ割合

おりである。さらに家の中と家の敷地・前庭についてインドネシアと日本の各学年男女の該当者数の記入者数に対する割合を図示したものが図1、図2である。両国で対応している6年生についてみると両国とも男子よりも女子のほうが家の中で遊ぶことが多い（角変換法による分散分析で、性別； $\chi^2=4.66$ $df=1$, $p<.05$ ）。また家の敷地・前庭は女子より男子に多く、日本よりインドネシアで多い（角変換法による分散分析で、性別； $\chi^2=8.70$ $df=1$, $p<.05$, 国別； $\chi^2=3.17$, $df=1$, $p<.10$ ）。後者の差は、1つには住宅事情の違いによるもので、インドネシアでは日本でも農村に見られるように、家のまわりの空地になった前庭（halaman）が広く、これが子どもの遊び場になっていることによるものである。日本ではそのような家のまわりの空地が都市ではほとんどなく、その代わりに道路や公園で遊ぶことになる。

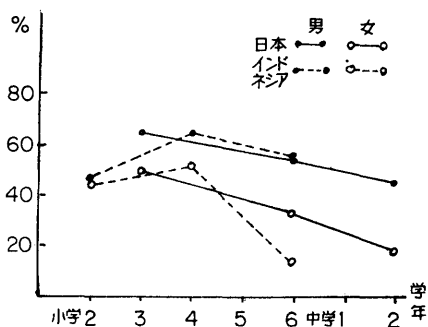


図3. 野外で遊ぶ割合

家の中と外との割合をみるために、屋内と野外の全体に対する野外の割合を示したものが図3である。これを国別に、学年と性別の2要因で検定した結果、両国でそれぞれ性別が有意であった（角変換法による分散分析で、インドネシア； $\chi^2=3.74$, $df=1$, $p<.05$, 日本； $\chi^2=5.90$, $df=1$, $p<.025$, なお日本については学年でも $\chi^2=5.51$, $df=1$, $p<.10$ で有意な傾向がみられた）。両国とも男子のほうが女子より野外で多く遊んでいるといえる。

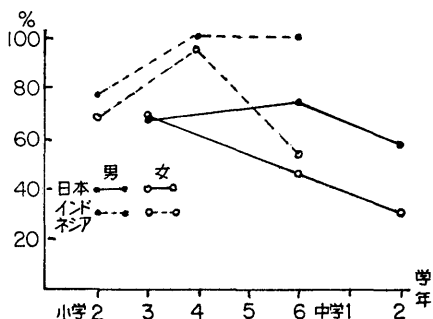


図4. 友達と遊ぶ割合

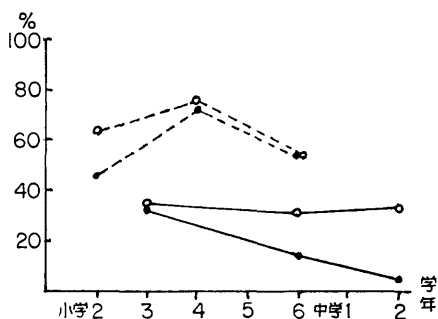


図5. きょうだいで遊ぶ割合

いっしょに遊ぶ人 それぞれの遊びでだれといっしょに遊んだかということは表7のとおりである。この表にもとづいて、友だちときょうだいとひとりについて、記入者数に対する該当者数の割合を図示したものが図4、5、6である。友だちと遊ぶのについて6年生で検定すると、性別と国の両要因とその両者の交互作用がみられた（角交換法による分散分析で、性別； $\chi^2=20.70$, $df=1$, $p<.001$, 国別； $\chi^2=6.93$, $df=1$, $p<.01$, 交互作用； $\chi^2=4.10$, $df=1$, $p<.05$ ）。つまり、男子は女子より、またインドネシアでは日本より友だちと遊ぶことが多いということである。交互作用は、インドネシアでの男女差が日本の男女差より大きいことを示している（インドネシアの男子は記入者全員が何らかの遊びで友だちと遊んだと答えている）。また、きょうだいと遊ぶ割合についての6年での検定でも国の要因が有意であった（ $\chi^2=8.97$, $df=1$, $p<.005$ ）。つまり、インドネシアのほうが日本よりきょうだいとよく遊んでいるということである。ただし、この「きょうだい」にはインドネシアについては兄弟姉妹のほか“saudara”“saudari”と呼ばれるいとこや親類

の子どもや場合によっては血縁のないものも含む広い範囲の同胞というべき者も含まれているので、日本の「きょうだい」と直接には比較できない。しかしそれでも、そのような血縁および同族の集団が近くに住んでいて遊び仲間になっていることは注目される。低中学年でも、日本と直接には比較できないが、きょうだいと遊ぶというのが多く、とくに4年生でひじょうに多い。日本ではきょうだいと遊ぶのは、女子では学年を通じてあまり変化がないが、男子では学年が上になるにつれて減っていることが目立つ。

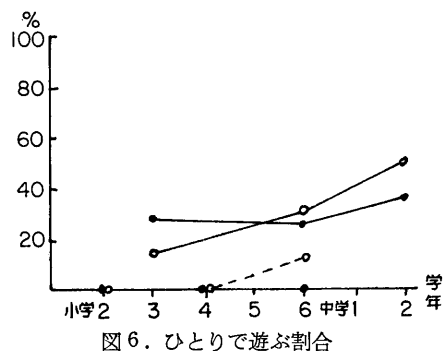


図6. ひとりで遊ぶ割合

表7. いっしょに遊ぶ人（数字は該当者数，カッコ内は記入者数比）

国	学 年	性別(記入者数)	友 だ ち	きょうだい	親	ひ と り
インドネシア	小学2年	男 (13)	10 (.77)	6 (.46)	1 (.08)	0
		女 (19)	13 (.68)	12 (.63)	4 (.21)	0
	小学4年	男 (18)	18(1.00)	13 (.72)	1 (.06)	0
		女 (20)	19 (.95)	15 (.75)	1 (.05)	0
	小学6年	男 (13)	13(1.00)	7 (.54)	0	0
		女 (17)	9 (.53)	9 (.53)	0	2 (.12)
日本	小学3年	男 (25)	17 (.68)	8 (.32)	0	7 (.28)
		女 (26)	18 (.69)	9 (.35)	3 (.12)	4 (.15)
	小学6年	男 (27)	20 (.74)	4 (.15)	0	7 (.26)
		女 (26)	12 (.46)	8 (.31)	0	8 (.31)
	中学2年	男 (19)	11 (.58)	1 (.35)	0	7 (.37)
		女 (12)	3 (.25)	4 (.33)	1 (.08)	6 (.50)

それに対して、ひとりで遊ぶのは日本のほうが多く、インドネシアでは6年生女子にいくらかあらわれるが、その他では皆無である。日本ではひとりで遊ぶのは、すでに3年生でかなりみられ、学年が上になるにつれて増加している。これは、日本では子どもの遊びが孤立化してきていることを示唆しているように思える。

なお、いつどれくらいの時間遊んだかという質問については、両国で比較しうるデータが得られなかったので、日本についてだけの時間表から得られた前記の結果で代えて省略する。

仕事・手伝いの種類 両国の子どもがどんな仕事や手伝いをしているかについては表8のとおりである。また何らかの仕事や手伝いをした人の被験者数に対する割合を図示したものが図7である。まず図7にみられるように、全体的にみてインドネシアの子どもは日本の子どもよりはるかによく仕事や手伝いをしている（角変換法による分散分析で、国別； $\chi^2=13.36$ df=1, $p<.001$ ）。インドネシアの子どものとくに女子は、ほとんどの子どもが何らかの仕事や手伝いをしているが、日本の子どもはせいぜい女子で60%程度しかしていない。

仕事の種類でとくに著しい差があるのは掃除で、図8で明らかにように掃除はインドネシアの子どものもっとも一般的な仕事のように思われるが、日本ではむしろまれな仕事であるようだ。

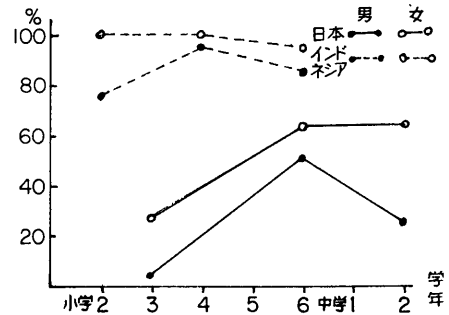


図7. 仕事、手伝いをした者の割合

表8. 仕事・手伝いの種類と該当者数（カッコ内は被験者数比）

国	学年	性別(被験者数)	掃除	料理・食事準備	食器洗い・後かたづけ	洗たく	子守り世話	買い物	水くみ	手伝い	留守番	ふとんしき	牛乳・新聞をとる	肩たたき	その他
インドネシア	小2	男(16)	8(.53)	2(.13)	0	2(.13)	0	2(.13)	3(.19)	2(.13)					4(.25)
		女(21)	13(.24)	5(.24)	4(.19)	0	1(.05)	4(.19)	1(.05)	9(.43)					0
	小4	男(20)	15(.75)	2(.10)	9(.45)	6(.30)	2(.10)	1(.05)	5(.25)	2(.10)					5(.25)
		女(20)	17(.85)	3(.15)	12(.60)	7(.35)	5(.25)	0	5(.25)	1(.05)					2(.10)
	小6	男(13)	7(.54)	0	0	1(.08)	0	0	0	1(.08)					4(.31)
		女(18)	12(.67)	4(.22)	3(.17)	0	4(.22)	0	1(.06)	0					1(.06)
日本	小3	男(38)	0	0	0	0	0	0	1(.03)	1(.03)	0	0	0	0	0
		女(37)	0	4(.11)	2(.05)	0	1(.03)	2(.05)	0	1(.03)	0	0	0	0	0
	小6	男(37)	0	7(.19)	4(.11)	1(.03)	0	3(.08)	1(.03)	1(.03)	6(.16)	1(.03)	0	0	0
		女(41)	3(.07)	11(.27)	12(.29)	2(.05)	1(.02)	4(.10)	0	1(.02)	0	0	0	0	1(.02)
	中2	男(35)	1(.03)	1(.03)	1(.03)	0	0	5(.14)	1(.03)	0	0	0	1(.03)	0	0
		女(42)	3(.07)	13(.31)	8(.19)	3(.07)	1(.02)	9(.21)	1(.02)	1(.02)	0	0	1(.02)	1(.02)	1(.02)

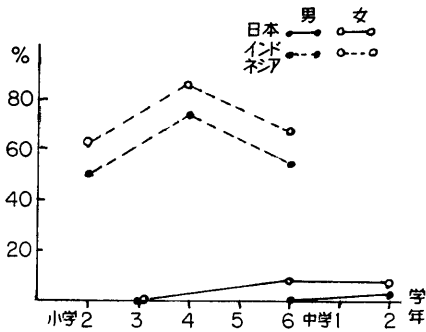


図8. 掃除の割合

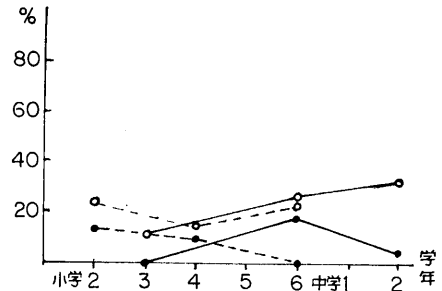


図9. 料理・食事の準備の割合

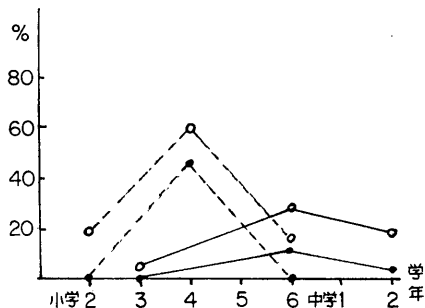


図10. 食器洗い・後かたづけの割合

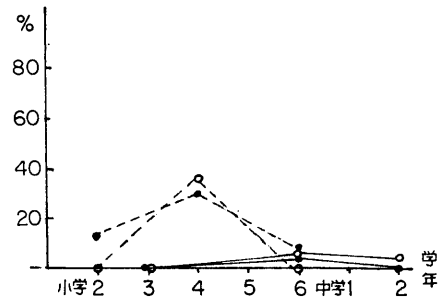


図11. 洗たくの割合

インドネシアの子どもでは各学年男女とも半数以上が掃除をしているが、日本では6年生女子と中学生で少しみられるだけである。図9の食事の準備と図10の後かたづけでは、6年生についてみる限り日本のこどものほうがいくらかよくしており、とくにインドネシアの6年生男子はどちらもまったくしていない。このことは、インドネシアのほうが食事の仕事に関して男女の役割分化がこの時期に生じるのではないかということを示唆している。しかし、図9と図10にみられるように食事のあとかたづけ・食器洗いと洗たくは4年生でよく行なわれている。さらに表8からは、水くみや6年生女子の子守り、2年生女子のたんなる親の手伝いなどがインドネシアの特徴として目立っている。買い物は日本では高学年になるほど多くなるが、インドネシアでは逆に低学年にしかみられないことも対照的である。インドネシアではちょっとした買物の使い走りさせられることが多いということだろうか。日本では6年生男子で新聞取りというような仕事や手伝いとはいえないような回答もみられる。

なお第3の質問項目である家庭での勉強については、インドネシア側のデータの読み取り、解釈が日本側で難しく、回答が科目を答えているに留まっているので、本論では省略する。

IV ま と め

この調査で明らかになったことは、まずインドネシアと日本では生活時間がかなり異なっているということである。インドネシアでは日本より朝はほぼ2時間早く活動が始まり学校が午前中

に終る。ただしこの調査にはあらわれなかったが、インドネシアでは校舎不足のため二部制の学校運営が行なわれていて、午前校と午後校とがあり、午後校の生徒は午後登校するようであるが、それでも朝の活動開始時間は午前校の生徒とさほど変わらないのではないかと思う。われわれの調査対象となった小学校は大学の附属校ということもあって午前の生活時間しかデータにあらわれていない。

第2に遊びについては、インドネシアの子どもと日本の子どもとはかなり共通した遊びをもっていることがわかった。しかし日本ではすたれつつある伝統的な子どもの遊びが、インドネシアではまだ盛んで行なわれているようにみえる。また遊び場についても家の周囲の空地 (halaman) があることが、日本のように危険な道路や特別に作られた公園を必ずしも必要としない状況を生んでいる。

品川氏やM・ミードのいう生産的実益的遊びの例は、この調査では見出せなかったが、女子のままごと類の遊びが盛んであることは、遊びが社会的機能を十分果たしていることを示している。仕事や手伝いでは、インドネシアの子どもは日本の子どもよりはるかに家の手伝いをしていることが明らかになり、子どもの仕事というものが社会的に存在していることが示唆された。金銭を得る仕事はこの調査にはあらわれなかったが、これは調査対象の社会経済的階層が比較的高かったことが関係していると思われる。これらの子どもの仕事や役割がどのように動機づけられているのか、どの程度の内発的動機づけを伴っていて、どの程度の自己規制を要するものかという動機づけの心理的力動については、このような実態記述的調査では明らかにできなかったが、少くとも子どもたちが他者からの強制による葛藤状況におかれているのではないということはいえるように思う。インドネシアでの調査に限って、遊びと仕事・手伝いと勉強の3項目の質問のあとに、それぞれをすることは「ひじょうに好きか」「好きだけどひじょうに好きなわけではないか」「きらいか」を問うたのであるが「きらいだ」と答えた子どもはほとんどいなかった。この質問はあまりに一般的すぎるので日本側の調査では省略し、正確な分析も行なわなかったが、こういった点をもっと詳しく調べ、さらに「なぜそのことをするのか」を問うことによって動機づけの心理的力動が明らかになっていく必要がある。

文 献

- 品川不二郎 (1947)：ジャワの子供，世界の子供（二），児童心理第1巻第2号（昭22，2月号），金子書房
原ひろ子(1979)：子どもの文化人類学，晶文社
ミード・M（畑中幸子他訳，1976）：サモアの思春期，蒼樹書房

SUMMARY

We carried out a cross-cultural survey on play and work activities of Indonesian and Japanese school children with the cooperation of Indonesian and Japanese psychologists so as to grasp children's ordinary life in both countries. We expected that this research would provide us with better understanding of their cognitive development.

For that purpose we constructed a questionnaire which included yesterday's timetable and such questions as what, when, how long, where and with whom they played, worked (or helped) and studied after school on the previous day. Subjects were chiefly primary school children.

We obtained comparable data in Indonesia (Yogyakarta) and in Japan (Kyoto). As for play activities, it has been found that there are many similar plays in both countries, some of which are, however, declining in Japan. Besides the social and environmental conditions for children to play in Indonesia are likely to be better than in Japan. As for work (or helping) at home, it seems that Indonesian children work and help much more for their family than Japanese. Indonesian children appear to have their own work role in their homes and society, while Japanese children live an easier life and have none.

（付記） この調査に協力していただいたジョクジャカルタ師範大学附属小学校のみなさん、京都市立藤森小学校、梅津小学校、西院小学校のみなさんと関係者の方々、またこれらの学校での調査を取りはからっていただいた本学野村庄吾教授に心から感謝します。なお調査データの整理・作表作図・検定には、後藤由利子さんに働いていただいた。あわせてここで深く謝意を表します。

（付 録） 質 問 紙

() 年 () 組 () 番

なまえ () (おとこ・おんな) () 才

「せつめい」

次のいくつかの質問は、あなたが家や家のまわりや道ばたや遊び場でいつもしていることについての質問です。次の質問に一つずつ順番に答えてください。どの質問も、あなたがきのうしたことについての質問です。

- 1) 次のページを開いて、そこにある表の中に、きのうあなたが朝おきて、夜ねるまでにしたことを思い出して、できるだけくわしく書き入れてください。

きのうあなたは朝、何時ごろにおきて、何時ごろ朝ごはんや昼ごはんや晩ごはんを食べましたか。また、何時ごろ学校に行き、何時ごろ学校から帰ってきましたか。もし、正確な時間をおぼえていなかったら、だいたい時間をその所を書いてください。それから、きのうあなたは、だいたい何時から何時ごろまで家の用事や仕事の手伝いをしましたか。また、何時から何時ごろまで家の中とか家の外で遊びましたか。また宿題をしたのは何時から何時ごろまででしたか。そのほかにきのうあなたがしたことがあったら、何でも書いてください。

その表を書き終わったら、次の質問に答えてください。

- 2) きんのあなたは、どんな遊びをしましたか、その遊びをあなたは、いつ、どれくらいの時間、どこで、だれといっしょにしましたか。

(どんな遊び)	(いつ、どれくらいの時間)	(どこで)	(だれといっしょに)
---------	---------------	-------	------------

- | | | | |
|----|-------|-------|-------|
| 1. | _____ | _____ | _____ |
| 2. | _____ | _____ | _____ |
| 3. | _____ | _____ | _____ |
| 4. | _____ | _____ | _____ |
| 5. | _____ | _____ | _____ |

- 3) きんのあなたは、どんな家の用事や仕事の手伝いをしましたか。もし、お金をもらう仕事をしたのなら、それも書いてください。あなたがした手伝いは、いつ、どれくらいの時間、どこで、だれといっしょにしましたか。

(どんな手伝いや仕事 をしたか)	(いつ、どれくら いの時間)	(どこで)	(だれといっしょに)
---------------------	-------------------	-------	------------

- | | | | |
|----|-------|-------|-------|
| 1. | _____ | _____ | _____ |
| 2. | _____ | _____ | _____ |
| 3. | _____ | _____ | _____ |
| 4. | _____ | _____ | _____ |
| 5. | _____ | _____ | _____ |

- 4) きんの、家に帰って、どんな宿題や勉強をしましたか。それはいつ、どれくらいの時間、どこでしましたか。また、だれかに教えてもらいましたか。それとも、自分一人でしたか。

	(どんな宿題や勉強を) しましたか	(いつ、どれくら いの時間	(どこで)	(だれかに教えてもら いましたか、それと も一人でしましたか)
1.				
2.				
3.				
4.				
5.				

時間	5時
	6
	7
	8
	9
	10
	11
	12
	1
	2
	3
	4
	5
	6
	7
	8
	9
	10
	11
	12